

二十一世紀の国々

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 8. 10	600
登録No. 02871	234
	EM



海外移住事業団 沖縄本部
〒900 那覇市西3丁目4番10号

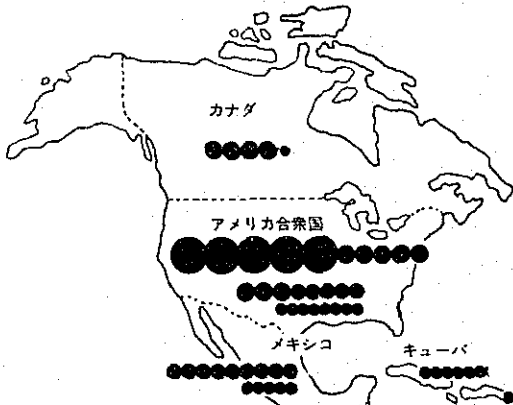
JICA
600
234
EM
LIBRARY

南・北アメリカ大陸に活躍する日系人数

昭和47年10月現在

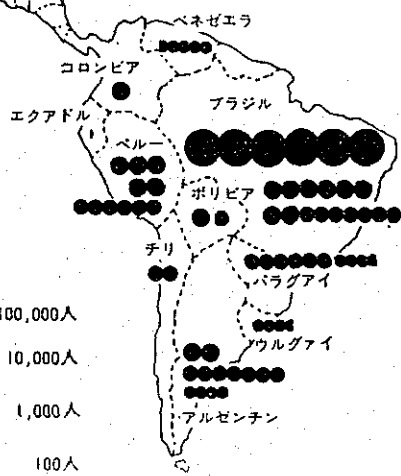
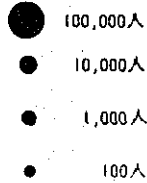
北・中アメリカ在留日系人数

国名	日系人
カナダ	40,123
アメリカ合衆国	585,828
メキシコ	9,566
ドミニカ	598
キューバ	624
その他	29
計	636,768



南アメリカ在留日系人数

国名	日系人
コロンビア	1,051
ベネズエラ	493
エクアドル	17
ペルー	55,954
チリ	2,065
ブラジル	687,014
ウルグアイ	376
アルゼンチン	27,440
パラグアイ	6,387
ボリビア	11,433
計	792,290



☒ 海外移住事業団は、海外移住知識の普及、現地における定着、発展等移住者並びに移住希望者へのサービスを、国の内外を通じて一貫、実施中の海外移住事業団法によつて設立されている公的実務機関です。 ☒



1019620〔2〕

海外移住を考える方へ

目次 (一九七四年六月)

発行・海外移住事業団沖繩支部

今日の高度経済成長をなしとげたわが国では反面インフレおよび環境汚染等さまざまな問題を生み、一方人生の真の「生きがい」を求める風潮が現われています。こうした状況の中で「脱日本」を試みる勇猛果敢な若者が増え、しかもその大半が海外における生活上と飛躍発展など、きわめて健全な方向を示しています。特に皆さんが希望するそれぞれの国において、自己の能力を伸ばし、相手国で敬愛される日系市民として発展することは、わが国および相手国の経済、文化の向上や友好の絆を深めるとともに、やがては世界の平和と繁栄に貢献する国際協力につながるものです。

現在、大きく門戸を開いて日本人を受入れている国々は、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、カナダ、アメリカの六カ国です。

―海外移住のしおり―

ボリビアの沖繩コロニア	2
未来の国南米は招く	11
海外移住メモ (渡航費のほか)	34
アルゼンチン移住のすゝめ	35
移住者の声	39
ボリビア移住のすゝめ	41
移住者の声	45
ブラジル移住のすゝめ	49
ペルー移住のすゝめ	55
〔表紙〕 第二次県議視察団提供	
〔表紙裏〕 南・北米大陸に活躍する日系人数	
〔裏表紙〕 あなたはどのコースを希望しますか?	

◎本誌は、一九六九年十一月から十二月の沖繩事務所長(現・当支部長)の現地視察記録を中心としてまとめたものです。

ボリビアの沖繩コロニア

私は昭和四十四年Vの十一月から十二月の初めにかけて約一ヶ月間に亘り、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、ペルーの五ヶ国を視察したが、私が見たボリビアについて以下述べてみたいと思う。ボリビアは南米のどまん中にある内陸国で、面積は日本の三倍強、人口の八五パーセントが農業に従事しているという農業国である。主要産物はジャガイモ、トウモロコシ、カカオ、コーヒー、米といったところである。

ボリビアのサンタクルス市郊外に、沖繩コロニア（移住地）があり、そこで約三千人の県人が農牧業に従事している。沖繩コロニアの総面積は、第一、第二、第三を合せて約五万町歩、まだまだ入植可能などころである。

ボリビアに沖繩から移住が行われたのは一九五四年である。第二次大戦の戦傷がいまだに全島にまなましく残っている頃であつた。しよう煙のけむる沖繩から新天地を求めてボリビアへ渡つた第一次移住の人々は筆舌につくせない辛酸をなめた。入植地は「うるま耕地」と名付けら

れたが、そこは道さえないジャングル地帯であつた。野宿をしながら開拓を進めて行つたが、そのうちに原因不明の熱病“うるま病”が発生、入植者の半数が罹病し、十五人も犠牲者が出たりで、ついに同移住地は放棄をしなければならなかつた。そのためリオ・パロメティアに一時転住し、今度はよく土地柄を見極めた上で、現在のリオグランデ河畔の第一コロニアに入植した。この第一コロニアに定着するまでに実に約三年の間、ジャングル地帯を転々と移動したものである。

この第一コロニアもジャングルであり、道も水もない点ではうるま耕地と同じであつた。たまり水をのみながら、野宿をしながら、ともすればくじけそうになる身にムテ打つて原始林を焼き払い、山から木をとり出して家を作り、血の汗を流して開拓を行なつてきたのである。現在の移住地は、ジャングルは拓かれて次第にその姿を消しつつあり、牧場には草を食む牛が群れ、畑には麦、米、トウモロコシがそのみどりの葉を風にそよがせている。原始林地帯は今や豊かな農業地帯へと変貌しつつあると云えよう。

ポリビアの沖繩コロニアは、正確にはサントクルス県ワルネス郡トコメチ村に属し、サントクルス市から北に約八十キロの地点にある。沖繩コロニアは第一、第二、第三と三つの移住地から成つていても、あわせ

て一つの移住地と見るべきであるが、形の上ではそれぞれ独立した格好になつてゐる。面積は第一コロニアが約一万三千町歩、第二コロニアが約一万六千七百町歩、第三コロニアが約一万八千町歩と広大である。三つの移住地は縦貫道路で連結されており、三十分そこそこで行くことができる。移住地間の距離は第三コロニアと第二コロニア間が十八キロ、第二コロニアと第一コロニア間が十六キロとなつてゐる。気温は年平均が二三度で常夏ともいふべき気候である。第三移住地から五五キロのところにあるサンタクルス市が沖繩コロニアから最も近い街らしい街と云えるが、その交通は主に農協のトラックを利用して行つてゐる。

サンタクルス市は人口約十三万、ここにサンタクルス県の県庁がある国立総合病院、国立大学、各種銀行、映画館（八館）、その他の公共施設が集中しているが近代的とは言ひ難く、非常に素朴な感じがする。建物は赤瓦の屋根がのつかつており、これは私たち日本人には親近感を抱かせる。ボンチヨを着たポリビア人がバナナをぶらさげて売つていたり、ニワトリをバタバタ云わせながら売つていたり、田舎びた感じのするところである。ポリビアの人種はアイマラ族、ケチニア族、白人、白人とポリビア人との混血から成つてゐる。ポリビアはその昔、広大な勢力と高度の文化を誇つたインカ帝国の一部であつたが、一五三五年イ

ンカが滅亡するとアルトベルーと呼ばれスペインの植民地となつた。混血が多いのはそのためである。サンタクルス市は近年、急激に発展し、現在ではラバス、コチャパンバにつぐボリビア第三の都市となつている。サンタクルス市はボリビアの交通の要衝にあたり、ブラジルのサントス及びアルゼンチンの首都ブエノスアイレスからそれぞれ国際列車が乗り入れている。又、最近サンタクルス市からもモンテローに向う十五キロ地点に新国際空港の建設が正式に決定し、新空港完成後はもつと大きな都市に発展するものと沖繩コロニアでは期待している。

海外移住事業団では移住希望者への移住相談、渡航手続、支度費の支給、渡航費の支給または一部補助など国内での指導、援助のほか、現地では移住地の一般管理、運営業務のほか、営農資金の貸付けをはじめブルトーザー、トラクターなどの貸出しも行つてゐるが、ボリビアの沖繩コロニアでは第一、第二、第三コロニアとも米国 A I D 資金援助によつて購入したトラクター、ブルトーザーを保有しており、組合は加入しさえすれば安い料金を貸出してゐる。沖繩コロニアでは今日もトラクターブルトーザーが陰りをあげ、ジャングルが拓かれてゐる。以前は米作一点ばかりであつたが、雨が降りすぎるとダメ、ふらないとまた不作というわけであまりに天候に左右されすぎるので、この営農方法は改められ、



(ポリビア) 第2オキナワ移住地の組合
事務所で有志と懇談する貝志堅支部長

今ではキビ作、養鶏、養豚、牧場など複合営農が進められつつある。そして沖繩コロニアでは、入其後、棉作がとり入れられるとともに、今後は畜産にも力を入れることがよいという見方がでていた。

ポリビアに移住するに当つて最も心配な点は子弟の教育であろうと思う。子弟教育に関しては各コロニアに学校が設置されており、日本からも有資格の立派な教師が派遣されて日本語教育も行なわれているので、ポリビアの子どもたちは他の国の日系人の子弟とは違つて、サンタクルス市郊外にコロニア沖繩農業協同組合連合会事務所が設置され、八千坪の敷地には農産品(精米)の倉庫、移住者の子弟の宿泊所もあつて、市内の大学、高校進学への便宜をはかつてゐる。

海外移住事業団では、このポリビアの沖繩コロニアをもつと良い移住

地にするために、ポリビア移住地整備五ヶ年計画を実施中である。これは昭和四十四年度を初年度として、昭和四十八年度までの五ヶ年間に行動うもので、その主軸は道路の建設、全戸既入植者にポンプ井戸の設置、畜産センターの建設となつており、その他に既施設の補強改築、新築などが合計五億一千万円の予算で決定している。これらは海外移住事業団がいかにかに沖繩コロニアに力を入れていくかの証左である。

ポリビアに移住する者には五十町歩が無償で与えられる。貴方を待つているその五十町歩の土地は、但し原始林であつて、あなたはその原始林を焼払い、畑にして行かなくてはならない。テレビも電灯も水道もない。開拓すれば豊かな耕地に変わる広大な土地があるだけである。ポリビアはこれから発展していく国なのであつて、これから発展していくために貴方の手を待っているといつた方が妥当だろう。ポリビアに限らず南米は広大で豊かで地下資源に富んでいて、その殆んどがまだ埋れたままである。

沖繩第一コロニアに目を転じてみよう。カワラぶきの家に住み、自家用の精米機を持つて、それを一日中ぶんぶん云わせている人がいる。その家から目を転じて畑をみると、そこは見事に拓かれた永久耕地が広がっていて、麦が青々と風にそよぎ、みどりのじゆうたんを思わせる。なん

とすばらしい農場だ。しかし此処に入植した当時は、此処は屋なお暗いジャングルであつたのだ。しかも第一コロニアの人々は、うるま耕地、パロメティア、そしてこの第一コロニアと三度も原始林を開拓し直す辛い開拓をやつてきた。一昨年八一九六八年は大水害に見舞われ、そしてあくる年は干ばつがやつてきた。それでもくじけずにかんばつた。その忍耐力が勝つて、今は学校があり、協同組合事務所があり、製材所があり、その第一コロニアの中心には小さいながらも商店街ができた。露天ではあるが映画館も建つた。此処が十数年前までは原始林であり、野生動物の天国だつたとはとても思えない変貌ぶりである。

移住者の中には百五十頭もの牛を持ち、一千町歩もの大農場を經營している人がいるが、よくもここまで成し遂げたと感嘆せざるを得ない。マイホーム主義に飽き足らない広大な新天地での活躍をお望みの方にはポリビアは格好の国と言えるだろう。但し、絶対に農業が好きでなくてはならない。もう一つ強調しておきたいのは、移住に対する姿勢のありかたである。一獲千金主義、お金をもうけたら帰ろうという人は失格である。南米という広大な地域で発展してやるうという心構えでなくてはならない。それも子供や孫の代で実をむすべよという長期の視野に立つならば、貴方は必ず成功すること請合ひである。

一ヶ月という僅かな期間ではあつたが南米を視察してきて、そのきびしさを肌で感じてきた私にはそういう言い方しかできない。苦勞する氣があれば、野宿をしてもくじけないだけの忍耐力があれば、南米は貴方に充分すぎるほど報いてくれるだろう。それを肝に銘じた上で移住して貰いたい。そしてポリビアでは約三千人の同胞が温く迎えてくれることを忘れたい。頂きたい。

南米の国々は殆んどが開発途上国で開発の手を待つているが、ポリビアはその中でも遅れている方である。しかし、現代のように日進月歩で変りつつある時代はないと思うし、近代化の波が押し寄せる日も間近いことだろう。ポリビアがどれほどの発展をとげ得るか、その予測は誰にもつかないのである。国が広大で資源が豊富だけになおさらである。今のところは非文化的な生活も余儀なくされるけれども、くり返すようだが、移住には長期的な視野をもつてのぞんでほしい。

いつまでもランプ生活が続くわけではないことを知つてほしい。航空機の発達で世界はどんどんせまくなりつつある。現在、ポリビアまで直行のジェット機に乗れば、東京から僅か三〇数時間で行くことができる。戦前は三ヶ月も船旅をしなければならなかつたことを思うと、なんとという相違だろう。今後この飛行時間はもつと短縮され、日帰りできる日が来るかも

知れない。そうなつたら世界はひとつと同じではないだろうか。やがて世界人としての生き方をしなければならぬ日がきつと来ることだろう。そういつた視野を持つて移住にはのぞんでほしいものである。

昔の移住は送り出しのみに重点が置かれたため、その後の援護対策が悪く棄民と悪口を言われたが、現代はポリビア沖繩コロニアのように年間莫大を費用をかけて移住地をよくするための努力がなされていることを注目して頂きたいと思う。

ポリビアが、南米が、貴方の手を待っている。海外発展したいと思う方は、どうぞ海外移住事業団沖繩支部を訪ねて頂きたい。

(支部長・具志堅 興栄)

〔編集者註〕 本誌の具志堅支部長の執筆内容は、昭和四十五年六月から八月にかけて、琉球新報並びに沖繩タイムスに掲載されたものを、本誌発行時点にあわせて、編集者が整理させていたゞきました。

未来の国、南米は招く

私は昭和四十四年十一月から十二月初旬にかけて約一ヶ月に亘つて、ペルー、ボリビア、ブラジル、パラグアイ、アルゼンチンの五ヶ国を視察した。そして、帰国した時、私は南米熱にとりつかれ、私の胸は若者のように燃えていた。私が海外移住という仕事に手を染めてから、僅か一年半位にしかならない。それまでは琉球政府で南米とはなんのゆかりもない仕事をしていたので、いきなり海外移住という仕事をしなければならなくなつた時、あえて此処に告白するが途方にくれた。南米について何の知識も持ち合わせていなかったからである。南米は広大であり、豊かな資源に恵まれた国である。沖縄のような小さな島国が発展する道は、海外に求めるしかないというのは通念となつているが、その南米を私は、知らなかつたのである。私自身が知らない国へ同胞を送り出してよいものか？ 私の胸をしきりにそういつた想念が去来し、正直いつてどういうふうに推しすすめたものか頭をかかえていた。その時、ペルー、ボリビア、パラグアイ、アルゼンチン、ブラジルを視察して来いという上からの命令である。私はワラを見付け出した溺者の心境で機上の人と

なつた。

そして一ヶ月を経た時、私は南米熱にとりつかれていたのである。私の南米熱は計つたらきつと四〇度を越えていて、体温計をこわしてしまつたことだろう。その南米熱はまだ冷めやらぬ、ますます高まるばかりで、私を若者のように馳りたてる。私の南米熱はポリビア熱に非ず、南米五ヶ国を視察した上での南米熱なのである。ポリビアだけを云々しては片手落ちだし、これでは不公平というものである。そこで、ベルー、ブラグアイ、アルゼンチン、ブラジルにも言及してみたく、あえてペンをとつた次第である。

まず、近年注目を集めているブラグアイについて述べてみたい。

ブラグアイは南米大陸の中部にある内陸国で、面積は日本よりやや大きく、四十万七千平方キロ、人口二百万人余という、南米の中では小国である。平和な農牧国で農業人口が国民の約四七%も占めている。しかし農耕地は僅かに全土の四%にすぎず、未開拓の部分が多く、バイオニアの手を待つてゐるといふ点では他の南米諸国と同じである。

ブラグアイにヨーロッパ人が初めて足をふみ入れたのは一五一六年二月のことであつた。スペイン人フアン・ディアス・デ・ソリスの率いる探検隊が、今日のラプラタ地方を経て、ウルグアイ河まで遡つたが、途

中挫折の浮目にあつた。次いで、ポルトガル人アレホ・ガルシア他数人が一五二四年、再び探検に出発、今日のブラジルのサンタカタリーナ、パラナ地方を経て、現在のアスンシオンをとり、ポリビアからベルの東部地方にまで侵入したが、その帰途、土人の襲撃に会い全滅の非運にあつた。これがヨーロッパ人がブラグアイに足跡を記した最初といわれている。過去においてブラグアイは二度までも白人を拒んでいるが、現在のブラグアイは白人によつて拓かれたのである。ブラグアイ建国の父といわれているイララはスペイン人である。そのため住民の九五%がスペイン人と原住民グアラニー族の混血で、黒人は全くいない。公用語はスペイン語であるが、人口の大部分はグアラニー語を話し、他方へ行くくとグアラニー語でなければ通じないところが多い。ブラグアイでは、首都アスンシオン市を中心とした百五十キロ圏内にその人口の二分の一の約百万人が住んでいる。

教育については、小学校六年間は無料の義務教育であるが、小学校への就学率が低く、文盲率は二七%の多きに至つている。そのためブラグアイ国文部省は文盲退治に近年力を入れている。大学は国立アスンシオン大学（在学生四千百人の総合大学）と私立カトリック大学（在学生千九百人の神学文科系大学）の二校があり、日系人も多数在学している。

パラグアイの四季は春が九月と十月の二ヶ月で、気温は大体二一度C（撰氏）、夏が十一月から三月まで平均二八度C、秋が四月と五月の二ヶ月で大体春と同じ位の気温、冬が六月から八月までの三ヶ月で平均十七度Cである。年間を通じての平均気温は二四度Cであるが、寒暑の差は相当激しく、冬は霜がしばしば降り、夏は四十度を越す酷暑に見舞われることも度々ある。雨量は余り多くない。東部地方では大体平均年間千七百ミリ、西部地方では少なく、千五百ミリ程度である。年間を通じてはつきりしないが、大体雨期と乾期に大別される。一回目の雨期は春に訪れ、九月中旬になると雨が降る。十一月中旬即ち夏に入ると乾期になり、それが一月中旬まで続く。更に一月中旬になると再び雨期が訪れ、三月まで続く。パラグアイはブラジル、アルゼンチン、ボリビアの三ヶ国に周囲をかこまれていて、国の中央部を南北に縦断するパラグアイ河により、南部（森林の多い丘陵地帯と平原が交錯する肥沃な地域で、農耕に適している）と、西北部（チャコ地方と称される塩分の多い荒野が広がっている）とで牧畜に適している）に大別される。

このように恵まれた気候と肥沃な土地に与えられた農業国パラグアイの主産物はタバコ、綿花、トウモロコシ、マンジヨカ、油桐、マテ茶である。特に牧畜に適しており、牧場可能地が全土の四〇%を占め、牧畜

が農業の基幹をなしている。家畜数は肉牛が人口の三倍に当る約六百万頭、馬約三五万頭、羊二〇万頭という数字はブラグアイが牧畜にいかにか適しているかを如実に示している。

移住といえはブラジルを思い出す位、ブラジルは日本人移住者の受入国として知られているが、最近はブラジルのほかアルゼンチン、ポリビア、中でもブラグアイがクローズ・アツブされてきたことは案外知られていない。

ブラグアイ国に外国から移民が入るようになったのは一九〇三年のことである。ブラグアイは一八六五年から一八七〇年までの五ケ年間、ブラジル、アルゼンチン及びウルグアイと砲火を交えた三國戦争の結果、約十五万平方キロ以上の領土を失い、当時の約百三〇万の人口が二三万にまで減少してしまつた。そのため国土の開発に外国人移民を受け入れざるを得なくなり、一九〇三年以来、移民法を制定して外国人移住者の導入を計るための奨励策を実施してきた。この移住者は当初、欧米人のみに限られていたが、初期の目的を達成することができなかつたため、ブラグアイ政府は一九三七年大統領をもつて、この欧米人優先主義を排し、有色人種も受け入れることとした。このようにして導入された外国人はドイツ人、ポーランド人、日本人、白系ロシア人、韓国人などであ



(パラグアイ) イグアス移住地にある
当事業団畜産センターの牧場風景

る。

パラグアイと日本との間に移住協定が結ばれたのは一九五九年十月で、三年間に八万五千人の日本人移住者を受け入れるというものであった。現在パラグアイには海外移住事業団によって造成された移住地がアルト・パラナフラム、イグアス、アマンバイと四ヶ所あり、約七千人の日本人移住者が開拓に励んでいる。特に最近、注目を集めているのが世界一の水量を誇るイグアスの滝近くに造成されているイグアス移住地である。このイグアス移住地は約八万八千町歩という広大なもので、首都アスンシオンに行くよりはブラジルに行つた方が近いといつた国境の移住地であるが、トマト、蔬菜、大豆、トウモロコシを栽培して堅実に収益をあげており、最近はその多角営農が行われ、百町歩農業実現の可能性を持つ優秀な移住として注目されだした。元インド大使那須 皓博士の立案によるイグアス

農牧開発株式会社が進出が決まり、着々と進行中である。またイグアス移住地を視察した岩手県知事八千田正氏は、東北の他県と一緒に力をあわせて南米東北村を建設しようという構想を打ち出すなど、イグアスを視察した人は必ずほれこんでしまふ程、優秀だとされている。

ではこのパラグアイに行くにはどうすればよいか？ 移住者の資格は一夫婦を中心にその親子兄弟で構成され、稼働者が三人以上あること但し、夫婦のみでも他の条件（例・資金）からおして開拓営農の能力が充分ありと認められた場合は考慮されることになつてゐる。永住の目的で移住すること、自営開拓者は所定の生活資金及び営農資金の携行が出来来る者であること、指名雇用契約移住者は充分な携行資金を準備出来る者で別にむずかしい条件はない。あとは渡航費の一部を除き全額支給されるし、営農資金の貸付などに関しては、海外移住事業団が援助の手をさしのべてゐる。

パラグアイへの移住者はポリビアと同じく、農業の好きを者に限る。そしてポリビアと違うところは、ポリビアでは五〇ヘクタールが無償で与えられるが、パラグアイでは三〇ヘクタール八一区画以上を購入しなければならぬ。土地代は一括払いのほか、出発前に一部頭金払込みのうゑ九年据置五年均等年賦払い方法もある。但し、ポリビアもイ

グアスもジャングルであることに変わりはない。

私がパラグアイを視察して驚いたのは、その立ちあがりの早さである。それは自然条件及び肥沃な土地という好条件にもよると思うが、それにしてジャングルを切り拓いての農業である。イグアスは移住地の中では最も若く、移住者が入植してから僅かに七年八移住地購入昭和三五年一〇月Vである。しかるに、道路の整備、学校、病院が完備し、約一千ヘクタールの畜産センターもあり、明るい豊かな農村という印象を受ける。

人口約三一万というパラグアイ屈指のアスンシオン市と隣国に大國ブラジルを控えていることにもよるが、イグアスが優秀な移住地であることを実際に目で確かめたことは大きな収穫であつた。

ポリビア移住地と比較して三〇ヘクタール以上を購入しなければならぬというギャップはあるけれども、農業が好きで南米の広大な大陸で大型農業をやつてみたいという人に推奨したい移住地である。

アルゼンチンは南米の中では先進国の中に入る。南米大陸の南部の大半を占め、その面積は日本の約八倍という巨大な国である。ラ・プラタ河を中心とするパンパと呼ばれる大平原地帯は世界第二の広さを誇り、かつ肥沃である。人口は二千三百万人足らずで、その大多数がスベイ

ン、イタリヤからの移民である。

アルゼンチンの主要産業はパンパ、大平原を利用した牧畜と農業で、一九六五年現在、牛約四六〇七万頭（世界第五位）、羊約四六〇〇万頭（世界第三位）、豚約三五〇万頭で、食肉の生産高が二〇九万トンという牧畜国である。

首都ブエノス・アイレスには世界的規模を誇る肉の冷凍工場がある。農産物の主なものは小麦、トウモロコシ、棉花、果樹等で、特に小麦の生産高は世界第七位を占め、南米全生産の半分を上回っている。そのため、輸出総額の九〇%以上が農畜産品であり、食肉、小麦、羊毛など農業の波長がアルゼンチンの経済を左右する決定的要因となつている程の農畜産国である。

アルゼンチンと日本との關係はかなり古く、一八九八年（明治三十一年）に日英交通商条約が締結されたときに始まる。日本人移住者がアルゼンチンへ渡つたのは日露戦争直後で、以来ほとんど移住して現在約二万数千人が活躍している。そのほぼ半数がブエノス・アイレス近郊で農業に従事し、その他が都市でクリーニング業、商業を営んでいるが、経済的に安定期に入つており、その成功ぶりは目をみはるものがある。

従来、アルゼンチンは白人移住者受入れ優先主義をとつていたので、

外国人の移住者はヨーロッパ系が多く、イタリア人八一%、スペイン人一五%、その他が四%となつていて黒人は全くいない。そのため日系人はすべて白人を雇用して各自、事業を行つており、白人に劣等意識をもつ日本人の感覚からすると奇異な感じがするほどである。

このように白人優先主義のため、戦前は日本人は外務省実習生とかその他、極めて限られた数の技術者しか移住が認められていなかつた。戦後になつて、アルゼンチンは日本人の計画移住を認め、一九五七年、日本人四百家族の入国枠が認められ、大きくその扉がひらかれたのである。現在、アルゼンチンの主を移住地にはガルアペー、アンデス、ウルキツサの各移住地がある。

(一) ガルアペー移住地（海外移住事業団直営）

アルゼンチン国東北部ミシオネス州ボサダス市より東北一七五キロの地点、アルトバラナ河の近くにある。亜熱帯性気候で気温は三七度からマイナス四度、年間雨量が一四〇〇から一八〇〇ミリもあり、タバコトウモロコシ、マンジョカ、豆類の短期作及び油桐、ミカン類、紅茶、パインアップル等の永年作に適している。面積は三一〇〇ヘクタールで分譲は一区画三〇ヘクタールから。

(二) アンデス移住地（海外移住事業団直営）

ブエノスアイレス市西方九〇〇キロ、メンドサ州へネラルアルペアル市郊外一四キロのアンデス山麓に位置し、乾燥した砂質地帯で、年間雨量は僅かに二〇〇から三〇〇ミリ、気温は二四度からマイナス八度である。灌漑が営農の必須条件となつてゐる。用水溝管理、配水は州が行なつており、利用者は水利税を払えばよく、ブドウや桃がよく成育してゐる。アンデス移住地は面積一三二二ヘクタールとほかの移住地よりは少し小さい。一区画を一〇ヘクタールとして分譲してゐるが相当多額の携行資金を必要とする。

(三) ウルキツサ移住地 (アルゼンチン農業審議会直営移住地)

ブエノスアイレス市の南方五十キロの地点にあり、アルゼンチン国側が独立農創設と都市への野菜供給を目的として設定した移住地である。面積七二五ヘクタール、小は七ヘクタールから大は一四ヘクタールの間の各種規模のロッテを分譲してゐる。主としてアルゼンチン人の入植を目的として作られたが、日本人に対しても割当があり、典型的な近郊農業で、野菜作り、花卉栽培を行つてゐる。

そのほかにも、小移住地が二、三あるがこれは割愛する。アルゼンチンへの移住の形態は次のとおりである。

(イ) 事業団直営の集団移住地に入植する自営開拓移住者

(口) アルゼンチン国直営の集団移住地に入植する自営開拓移住者

(ハ) 公募による雇用呼寄単独青年移住者（農業はじめ商工青年移住者）

技術移住者

(ニ) 近親呼寄移住者

(ホ) 沖繩からアルゼンチンへの移住は殆んどが近親呼寄移住で、自営農として入植した者はいない。白人優先主義だということを感じて不安を覚える人がいるようだが、アルゼンチンにおいては日系人は敬愛されている。それは先輩移民が決して日本人としての誇りをきづつけてはならないと努力をしてきたおかげである。アルゼンチンでは、クリーニング業が殆んどだが、ある県人が火事を出し、お客様からあずかつた衣服もろとも全焼してしまつたことがあつた。その人は、記憶を頼りに全部新しいのを買つて返し、客に少しの損失も与えなかつた。このような美談ならアルゼンチンには枚挙にいとまがない程沢山あり、日本人は正直でまじめで働き者で間違いがないと絶大な信用を得ている。

気候風土が日本と似ていて、国の経済力も高く、生活水準が南米中最高に近い。外国移住者歓迎の政策を打ち出しており、日本人移住者には最も定着し易い国ではないかと感じた次第である。アルゼンチンの県人の活躍ぶりをみるとそれをなお痛切に感じた。アルゼンチンでは、沖繩

県人は日系人八一九七二年調べ、二七、八〇〇人Vのうち七割を占めている。殆んどがクリーニング業だが、かなり手広く行なつており相当大きな邸宅に住んでいる。沖繩県人会館も二階建て演芸のできる立派な舞台付ホールまであり、アルゼンチンにおける沖繩県人の成功ぶりを如実に示すものとして県人の自慢の種になつてゐる。そのほか野球場も所有しており、豊かにアルゼンチンの生活をたのしんでいる。

こうした先輩移民の築いた地盤に支えられて、戦後移住した人は成功が早い。単独で移住しクリーニング屋の見習いからスタートした人が三年で独立、クリーニング店を経営しているにはおどろかされるとともに、アルゼンチンへの移住者送業務に自信を深めた次第である。

では南米の表玄関といわれるペルーはどうであろうか。ペルーには約六万人の日系人がおり、そのうちの約七割を県人が占めている。ペルーは商業の国であり、レストラン業が最も多く、ついで洋品店、文房具店雑貨屋となつてゐる。この国ほど商売で旨味のあるところはないと県人がいう程、みな経済的には豊かな生活をしている。その成功ぶりを示すものは、皇太子御夫妻御臨席のもとに落成式が行なわれた日秘文化会館であり、ラ・ウニオン運動場である。移住者の子弟は、ある者は弁護士となり、ある者は医者となり、北米に留学している子弟も多く、その優

秀性はペルー人から敬愛されている。現在のペルーの日系人の成功ぶりからは初期移民の苦勞はその断片すら窺えないが、過去には血と涙の歴史があつた。

ペルーに移民が始つたのは明治三二年のことであつた。佐倉丸を第一船として契約キビ作労働者として移住したのが最初であり、これはブラジルより九年も早い。労働者として移住した人々を待つていたのはドレイに等しい厳しい労働と風土病であつた。ブタ小屋にも等しい住居で看病する人もなく風土病で倒れた人は数知れず、また厳しい労働に耐えられずに逃亡して砂漠に消えた人も多く、それら犠牲者の墓標は今なお砂漠の中にひっそりと建つてゐる。言葉もわからず、西も東もわからない異郷の地で、人々は手まね足まねで道端で小さな商いをする。それから次第に独立していつた。ある人はわずかばかりの野菜を並べ、ある人は氷水を路傍で売つた。まじめで正直でよく働く、それが苦境をのりこえさせ現在の成功を築いたのである。

日本語放送局があり、おすし屋あり、日本料理店があり、日本食料品店あり、でもすればペルーなどという遙か異郷の地にあることなど、旅人に忘れさせる程日本文化の香りもただようすばらしい発展ぶりを示している。

ペルーは南米大陸の中西部にあり、太平洋岸沿いに南北にのびた細長い国である。面積は日本の約三倍もあり、沖繩全住民が移住してもどこえいつたかという程の広大な国である。気候は大別して夏季が十二月から五月まで、冬季が六月から十一月まで、年間平均気温が二二度〇といふ極めて温暖な国である。特に沖繩の気候と似ていて、われわれには住みよいところといえる。ブーゲンビリヤ、仏桑華、カンナ、きょうり竹桃など、植物も沖繩と同じで親近感を覚えさせる。

ペルーはアンデス山岳地帯に紀元前年チヤビン文化が起り、テイワナコ文化を経て強大なインカ帝国によつて築かれた。しかし、一五三二年スペインの遠征司令管ピサロの軍隊はインカ王アタワルパを奇襲して捕りよとなし、国中から黄金を集めさせ、これをとりあげた上で殺し、インカを滅亡させた。以来スペインに統治されていたが、十九世紀に入り南米各地に次々と独立気運が起り、一八二四年ペルーもスペイン王党派を破り独立するに至つた。ペルーの推定人口は一二〇一万人、人種構成は白人一三%、インディオ四九%、混血三七%、その他が一%である。日本人と中国人はこの一%の中に含まれている。またアフリカ系黒人も僅かながらいるが、その数は約一万人程度と推定されている。

教育課程は小、中、大学教育の三段階に分れ、小学校が一万八千校、

中学校一四七二校、大学二七校（国立二〇、私立七）である。

新聞発行部数は全国で約三五万部、ラジオ局四八局、テレビ局三局、その普及状況はラジオ約五〇万台、テレビ約四万台程度と推定されている。生活水準はリマなど都市地区では比較的よいが、奥地へ行くとペルーのインディオは二千年前の昔さながらの生活をしている。公用語はスペイン語であるが、奥地に行くときケチュア語になる。ペルー人は大変におとなしく安い賃金で雇えるので、ペルーの日系人はこういつたペルー人の安い労働力に支えられて各自事業を行い成功しているのである。

ペルーの経済構造は多層化しており、中南米では恵まれている方である。農業は甘麻、棉花、コーヒーなど輸出作物のほか、国内用として、穀類、野菜が栽培されている。水産は日本を抜いて世界一となり、魚粉を多く輸出している。また鉱物資源が豊富で、輸出総額の四割を鉄鉱石、亜鉛、銅などで占めている。

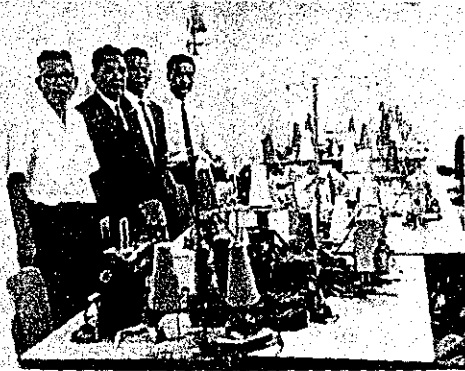
ペルーは雨がふらず砂漠の国である。山という山は禿げていて、緑は髪の毛一筋ほども見つからない。リマの街を一步出ると月世界へ迷い込んでしまったかと思うほど不毛の砂漠地帯が地平線の彼方まで広がっている。しかし、この砂漠も地味は大変によいので水さえやれば忽ち豊かな緑野に変貌する。現に大々的に農業を行つている県人もいる位である。

ベルーは商業もよし農業もよしの国であるが、惜しいことに未だに移住協定が結ばれておらず、年間一五〇名の近親呼寄しか認められていないことを残念に思う。私は是非とも移住協定が近い将来に結ばれるより期待するものである。それほどベルーは私の心を魅了したのである。

最後に移民の国の異名を持つブラジルについて述べてみたい。

ブラジルは南米大陸の実に四七%を占め、日本の約二三倍という超ジャンボ大国である。アメリカ合衆国などはすつぱりはまり込んで、なお且つ日本をのみこむだけの余裕があるという南米最大の国である。人口は約八千五百万人へ一九七二年調べ、九八二〇万人で、移民の国と称されることからわかるように多種民族で構成され、その民族は百にもものぼるといわれ、世界で最も人種差別のない国としても知られている。

ブラジルの産業としてはなんといつても農業である。耕地面積は全国土のわずか四%余にすぎないが、農産物が輸出総額の八九%と農業の比重は極めて大きい。特にコーヒーは全世界の生産量の五〇%を占め世界第一位となつている。牧畜業も盛んである。鉱業は鉄、マンガン、ダイヤモンド、水晶、クローム、石油などの資源に恵まれており、なかでも鉄鋼石は埋蔵量三四〇億トンといわれている。工業は戦後急速に近代化し化学、製紙、重電機、セメント、自動車工業などの発達は特に著しい。



(ブラジル) サンパウロ市内にある日本人経営の縫製工場の一部

ものがあり、中南米第一の工業国である。

ブラジルに日本からの移住が行なわれたのは一九〇八年四月、七八一名が笠戸丸で渡つたのに始まる。以後今日まで六〇余年の歴史を持ち、約六五万人余の日系人が活躍する最大の移住先である。初期の移民はコーヒー園の契約労働者としてブラジルの土をふんだ安い賃金で粗末な小舎をあてがわれただけで、ドレイに等しい扱いを受けなければならなかつた。賃金は決つているとは云えコーヒー園の売店からみなくては差し引かれて実際にはお金を手掛買ひしたので、いざ給料日となつても余りの辛さに耐えかねて逃亡する人が続出した。すると逃亡せずに残つていた人のところへ尻ぬぐいがまわつてきて、あの逃亡移民はまだ一ケ年契約が残っている、その分まで働けといわれて自分の契約は終了しても

出られない人もいたという。泣くにも泣けない辛い日々を初期の人々は送つたのである。このように幾多の苦難を経て今日のブラジル日系人の繁栄は築かれた。金もなく言葉も知らず裸一貫から立ちあがつたにしてはなんとという素晴らしい発展ぶりだろうか。それは信じられない位である人間のバイタリテイの無限の可能性を見直す気持ちにさせられる。ブラジルの日系人は殆んど農業に従事している人が多いが、その大物はブラジルの百人の大地主の中に加えられるほど広大な農場を持ち、そのコーヒー園を見まわるには自家用飛行機をもつて行なり。それほど広大なコーヒー園の所有者がいる。牧場にしても千五百ヘクタールという広大なもので、とても一日で見まわることは不可能である。これはまあ特例であるけれども、それにしても驚異的な成功ぶりである。

サンパウロ市内ではどこにいつても日本人が店を構え、日本人商店街、日本式料亭もある。日本映画常設館、日本語新聞社、日本語放送局もあり、ブラジル語を知らなくともブラジルでは旅ができるほどで、まさに小日本の観がある。

ブラジルにおいては日系人の農業に対する貢献は計り知れないものがあり、日系人がもしストでも起して農業を放棄したら、ブラジルは食糧危機におち入るだろうと豪語するほどである。

サンパウロ市にはブラジルの胃袋の異名を持つセアーザという食糧配給センターがあるが、そこで扱う農生産品の九〇%まで日系人が取り扱っている。ブラジルの輸出総額の八九%を農産物で占めているが、これは日系人が日本から各種の農産物の種子を持つて来て、それをブラジルの風土に合うように改良し生産をあげたからだということである。

日系人が改良した品種はおびただしい数にのぼっているそうである。特にコーヒー袋の原料として欠くことのできないジュート（黄麻）及びピメンタ（胡椒）の栽培に成功し、ピメンタ王国を築いたことはブラジル政府をして日系人に対し一目も二目も置かせることになつた。移住先国に対しこれほど大きな貢献をしている国民は他に類をみないであろうし、世界に誇る偉業である。

ブラジルを旅するとその広大さ、その豊かさへの息吹きに魅せられずにはおれない。みごとなハイウェイがブラジル全土を縦横に走っておりまだまだ未開の地域もあるけれどもこんなにジャンボを国がこれから拓かれていくのかと思うと、その無限の発展性をかい間見る思いがして、小さな沖繩から旅する人にはクタ外れの大きさに陶然となる程である。ブラジルは明るい未来を背負つた輝ける若い国だと感じさせられ、もう少し若かつたらなあと、つくづく思つた次第である。

未来ある若者たちよ、このように可能性に満ち溢れた南米の新天地に
どしどし発展しようではないか。私は心の底からこう叫びたくをつた。

現在のところ、南米移住者はブラジルが最も多く、主に呼寄せ移住であ
るが、私はもつともつと移住してもらいたいと思う。ブラジルへの移住
形態は現在のところ、次の通りである。

(一) 工業技術移住 能力主義が徹底しているので、実力があれば高
賃金で迎えられ重要なポストでもつくことができる。

(二) 農業技術移住 サンパウロ州、パラナ州を中心に蔬菜、果樹な
どの栽培に従事する農業技術を持つ青年が歓迎されている。

(三) 自営開拓移住 国際商品として脚光を浴びてきたビメンタ栽培
の第二トメアス移住地、桃、リンゴ、ぶどう等の温帯果樹栽培のラーモ
ス移住地、米作中心のグアタバラ移住地などが現在日本から入植可能な
自営開拓移住地である。

あなたがその気になりさえすれば南米移住は殆んど可能である。しか
し、出かけるからには岩をも砕く固い決意をしていただきたい。南米移
住は昔と違つて先輩移住者が経験したようなひどい苦勞はしなくてすむ
が移住に苦勞はつきもの、新しい苦勞があなたを待つていることをユメ
忘れないでいただきたい。

よく沖繩でもなんとか食べていかれるのに、なぜわざわざ南米まで行く必要があるかという人がある。私はその人に、見方が近視眼的すぎると云いたい。南米移住は長期的、世界的視野をもつて行なわれるものである。

戦前の移住者は出かせぎ移民であつた。しかし、昨今はみな永住移住である。航空機の発達により現在は、ベルーなら僅か二二時間で行くことができる。この時間は今後もつと短縮されるだろう。そうなれば人種の交流はもつと激しくなり、早晚、私たちは世界人としての意識をもつて生活しなければならなくなるだろう。南米とは速くて近き国になるであろう。小さい島国でマイホーム主義のささやかな人生を送るよりは、南米という大陸でポルトガル語をはなし、あるいはスペイン語をはなし、外国人の中で、医者として、あるいは市長として活躍する二世たちをみた時に、南米という広大な世界で国際人として生きる人生の方が、幅ひろく行動半径の大きい生き方としてすばらしいと思つたことである。移民の先駆者、当山久三先生の「吾等の家は五大州」という言葉が実感として胸にこたえた。その偉大さを改めて認識するとともに、私は第二の当山久三として専心移住業務に捧げようと決意した次第である。

私は沖縄の民族発展の道は海外移住以外にないと信じている。沖縄は小さい島国であり、百万という人口をかかえていては、今後発展するにしても限度があると思う。最近、本土就職が盛んに行なわれているが、そこにはささやかなサラリーマン生活があるのみであり、日本にしても同が小さいから、しよせんは移住を余儀なくされるのではないかと思う。沖縄からの真の発展は海外移住を抜きにしては到底考えられないと確信している。

私は南米熱にかかつているが、これを広く全琉に伝染させたいと思つて筆をとつた次第だ。私は、みんな南米熱にかかつてもらいたいと思つている。そして民族発展のため、あなた自身の豊かな人生のために、世界人として海外で発展していただきたいと切に望んでいる。

南米はあなたを待っている。

私はもう一度ここにこの言葉を書いてペンを置く。

南米はあなたを待っている。

(支部長・具志堅興栄)

〔海外移住メモ〕

●渡航費について

- 技術及び農業雇用移住者……単身は年間所得一四〇万円未満の場合八〇%支給、家族は年間所得二〇〇万円未満の場合一〇〇%支給
- 自営開拓農業移住者……年間所得が三二〇万円未満の場合一〇〇%支給

- 一、中南米移住……渡航費支給基準の改定により、昭和四八年四月一日以降、本人の年間所得（前年度）に応じて一部または全額自己負担（例：羽田↔サンパウロ航空賃約二六五、〇〇〇円となる場合もあります）。
- 二、カナダ移住……全額自己負担、銀行ローン利用可能。

※くわしくは海外移住事業団沖縄支部におたずね下さい。

5。

アルゼンチン移住のすゝめ

在亜沖繩連合会々長 佐久川 忠 助

アメリカ大陸の発見により、欧州やイギリスから新大陸を目指して多くの移住者が殺到し、北アメリカはアングロサクソン系、中央及び南アメリカはラテン系の移民によってそれぞれ国造りが進められました。その結果、南アメリカではブラジル、ポリビア等十数ヶ国の独立国が誕生し、今日に至っております。アルゼンチンもその一つで住民の大半はスペイン系とイタリア系によって占められインディオおよびその混血がきわめて少いのがアルゼンチンの人種構成の特色です。欧州からの移民は、コツコツと働いて先ず宅地を購入し、二、三年後には住宅を建築し、永住の基礎を固めます。日曜日や祭日を利用して夫婦で住宅を建てゝいる風景をよく見かけます。

このように欧州移民と日本移民、特に戦前のそれとは、その心構えにおいて根本的に違っております。そのような心構えが彼等欧州からの移住者を大成させ、中には農場の中に林や湖が点在し、農場見廻り用の飛行場まで備えた大牧場経営者を生む結果ともなつたのです。

最も時期的に日本は、徳川時代の鎖国政策により、彼等には数世紀

の遅れをとっておりこれから期待がもたれるところです。

私共が小学生の頃習った童話に、竜宮で乙姫様を相手に夜を日についで遊びふけり、貴重な青春を浪費し、気がついて故郷に舞い戻ってみたら周囲によるべとてなく、土産にももらった玉手箱をあけたら白い煙で老人になった浦島太郎の話や桃太郎の鬼が島征伐の話がありました。だが、これなどは出稼ぎ根性丸出しの、かつての日本移民の姿そのものだと言えないでしょうか。

しかし、終戦を境に日本移民もようやく目覚め、南米の地に骨を埋めるべく永住を決意し始めたのです。南米の国々にはこれから開発される分野がたくさん残されています。

私達は百年後に、私達の子弟の時代に夢をつなぎ、大きく期待し、その時こそアルゼンチンのため、ひいては日本のため大いに力になれることを確信しております。

海外移住というものは、このような長期的な視野でとらえられるべきものだと思います。狭い土地で押しあって暮らしていたのではモヤンの如きもので、心身健全な人間の成長はとも期待できません。

こゝアルゼンチンでは広大な沃野が広がりいくら飛び廻っても、つかえることを知りません。人間到るところ青山ありの心意気で世界の

人種が集まるアルゼンチンで男一匹、生き甲斐のある生活に情熱をかけてみませんか。働く意志と健全な身体があれば充分報われる天地であり、又、それが移住者にとっては何物にも代え難い大切な資本なのです。

六十余年前、裸一貫で海を渡ったブラジル移民の子弟の中から政界や財界を始め、あらゆる分野で目覚ましい発展をし、中にはブラジル社会で一流人物に指折り数えられる人材も輩出しています。

こゝアルゼンチンも近い将来私達の子弟がアルゼンチン社会の明星として、かけがえのない人材に成長してくれることを期待し、又確信しております。これこそが海外移住の真実の姿であり、新しい移住の意義もこの辺にあるものだと思います。

心ある若者諸君がどしどし海外へ、アルゼンチンへ発展されんことを心から願っております。

(一九七〇年一月)

〔編集者註〕 現在は大城宣彦氏が会長をされています。

沖繩県海外移住の歩み (1)

- 一八九九(明治32)年 12月5日、当山久三らのあっせんで、第一回県人ハワイ移住者二七人を送り出す。
- 一九〇三(" 36)年 北米合衆国へ県人移住者五一人が初渡航。
- 一九〇四(" 37)年 ファリリツピンへ大城孝蔵ら三六〇人が渡航、ベンゲット道路工事労務者として働く。
- メキシコへ県人移住者二三人が初渡航。
- 一九〇五(" 38)年 南太平洋のニューカレドニア島(仏領)へ県人三八七人が渡航。
- 一九〇六(" 39)年 ペルーへ県人移住者一一一人が初渡航。
- 一九〇七(" 40)年 カナダへ県人移住者一五二人が初渡航。
- 一九〇八(" 41)年 六月十八日、移民船笠戸丸がわが国最初のブラジル移民セハ一名を乗せてサントス港へ入港。この中に三五五人の県人も入っていた。

◎ 幸地繁雄氏(42) 一ブエノス市内一

嘉手納村出身、一九五一年十一月渡亜
渡亜。製菓工場経営、家族六名

私は高級菓子を製造しております。長女は
経済大学二年におります。

企業家を歓迎する当地への移住は先ず第一
に技術面を重視して移住を決めること、第二
に資金面であるが、何はともあれ企業移住を
志す人は必ず一度当地を視察されることをお
すすめします。

移住成功の秘訣は先ず健康です。第二は七
転八起きの強い決意と根性が大切です。

(アルゼンチン)

◎ 玉城昌一氏(41) 一ブエノス市内一

本部町出身、一九五一年十一月渡亜
農業経営、家族七名

三六町歩の農場にはキユリ、トマト、ピー
マン等がよく育ち、年収七万ドル程度あげて

います。長女は法科大学に通い、長男は商業
学校、次男、次女は小学校、幼稚園にとそれ
ぞれ元気で通っています。

狭い沖繩でアクセクするより、広い南米の
空の下でじっくり将来の運命を開拓せよとお
すすめします。

(アルゼンチン)

◎ 大城宣彦氏(40) 一ブエノス市内一

大里村出身、一九五二年四月渡亜
フラスナー及同製造機械製作
家族六名

建坪五千平方メートルの工場でフラスナー
とフラスナー製造機を製作しており、従業員
は七〇名です。

今後の海外移住のあり方として企業の進出
を歓迎します。と同時に根性ある信念をもつ
た心身健全な有能な人材の移住及び技術を身
につけた若い青年の移住を大いにおすすめて
います。

(アルゼンチン)

◎ 座間味良吉氏 (40) ーブエノス市内ー

コザ市出身、一九五〇年十一月渡亜
雑貨店、洋裁店経営、家族四名

一九六七年に家族で郷里を訪問しており、その後も在郷の父や親戚とは文通を続けておりますので親戚に対しては別に言うことはありません。

これからアルゼンチンへ移住を希望される方におすゝめしたいことは、なるべく本人又は家族の代表が移住を決定される前に当国を訪問され視察すること。もしそれが不可能の場合は、既に移住しておられる親戚や同村出身者に連絡をとり、こちらの事情をよく確認すること、特に企業移住の場合は本人が来亜を、特にされて、ご自分の目で確かめるのが非常に、得策だと考えます。

(アルゼンチン)

◎ 伊良波幸一氏 (48) ーブエノス市内ー

今帰仁村出身、一九五二年五月渡亜
花卉栽培、家族七名

バラ、カーネーション、蘭を栽培して、年間約二万ドルの収益を上げています。長男は医科大学に通い、長女は家事手伝い、次男、次女、三女はそれぞれ高校に通っています。子供の将来と生活の安定を願う者は早く目覚めて勇飛せよ、と心から呼びかけたい。働き甲斐があり、働けば働くほど安楽な生活が出来ること證合いだ。

(アルゼンチン)

移住者の声

(一九七〇年)

ポリビア移住のすゝめ

ポリビア沖繩農業協同組合
連 合 会 々 々 長 当 間 徳 善

ポリビア移住については、いろいろの変遷があつて一口には申し上げられません。戦後、沖繩からの自営開拓移住の嚆矢へこうして、として茨の道を歩み続け、今日ようやく苦勞多かつた開拓時代を過ぎ、いよいよ発展の段階を迎えたと言えましょう。

とにかく、人跡未踏の原始林の中に私共の力によつて立派な移住地を作り上げたことは自他共に誇り得る偉業かと確信しております。既に耕地面積八〇〇町歩、大型トラクターを駆使して年間稲作一〇〇町歩、肥育牛二〇〇頭という沖繩ではとうてい考えられない大型農業をしている仲間もおります。

一九六七年以降、移住地の管理運営も従米の琉球政府より海外移住事業団に引継がれ、環境整備を初め営農指導や援護等の面が一段と強化され、更に一九六九年度を初年次とする移住地整備五カ年計画がスタートし、私共の待望の飲料水確保のための打込み井戸の設置、道路の補強、学校、病院の充実等の諸施策が、つぎつぎに実施され非常に心

強く感じております。

或る人はポリビアを称して「金の椅子に座っている乞食」と評しております。果しなく広がる豊かな国土、多くの地下資源を持ちながら人口僅かに四〇〇万で国土の開発が充分にできず貧乏しているという意味でありましょう。土地が狭く、何の資源らしい資源もなく米軍の基地に頼って育ってきたわれわれの母県沖繩にひきかえ、この国の豊かな自然と、おゝらから将来の可能性に満ち溢れた国柄は金くうらやましい限りであります。

私達は遠く海外に在っても郷土から寄せられる様々なニュースに耳を傾け、沖繩の発展と皆さんの限りない幸福を心から祈るものです。日本一の実績をもつ移住県沖繩として、或は又、県民の幸福追求と民族発展の立場から、本土復帰後も、海外移住事業は県政の大きな柱ではなからうかと思えます。

こゝポリビアでは勤勉で、開拓精神の旺盛な移住者を歓迎しております。沖繩移住地でも、三十年位無肥料で耕作できる豊かな土地が今なおジャングルに覆われて開発を待ち受けています。然し乍ら、南米の国々が何時までも海外からの移民を歓迎するとは考えられません。何れ、その国が必要とする開発人口に達したとき、他の先進諸国がそ

うであるように、移住者受入れの門戸は堅く閉ざれることでしよう。土地狭隘でしかも人口はいたって稠密へちやうみつゝである沖繩の兄弟にとつて、自分の能力を存分に發揮し、伸び伸びと幸福追求の出来る場として南米の国々が広く門戸を開放していることはありがたいことです。

私共もよりやく經濟基盤を確立し、明日への發展を目指して着々とその準備を整えており、出来得る限り早い機会に後続移住者を呼寄せべく努力致しておりますが、もし開拓初期の移住地造りに私共と勞苦を共にする意志ある方がおりますならば、双手を挙げて歓迎いたします。今、移住地ではあなた方のような意志強固な開發能力を備えた人材をこそ求めているのです。

(一九七〇年一月)

〔編集者註〕 現在は宮城徳昌氏が会長をされています。

沖縄県海外移住の歩み (2)

- 一九二二(大正元)年 シンガポール(英領)へ県人二五人が追込網漁業に就労のため渡航。
- 一九二三(〃)年 ジャワ(オランダ領)へ県人五人が追込網漁業に就労のため渡航。
- 県人のブラジル移住が外務省から規制された(大正6年に解除された。)
- 一九一五(〃)年 十一月、糸満出身玉城某ら一七人がサイパン島で追込網漁業を始める。
- 一九一九(〃)年 県人のブラジル移住が再び規制された(大正14年までつづく。)
- 一九二二(〃)年 南洋興発株式会社がキビ作労務者として県人の導入を始める。
- 一九二四(〃)年 十一月十七日、社団法人・沖縄県海外協会が設立される。

◎ 野里栄順氏 (43) — オキナワ移住地 —

大宜味村出身、一九五四年六月十九

日出発ポルビア第一次移民、九名

陸稲十五町歩、とうもろこし三〇町歩、大豆十二町歩、牛二八頭、豚一二〇頭、鶏八〇〇羽といったところが経営の実態です。子供達も順調に成長して長男は高校生でコロニアから四五料程離れたモンテローの町に出ています。次男は中学三年、三男は中学二年、以下五男まで小学校です。当地はこれから発展する可能性ある国であり、特に移住地はこれから大いに開発される地域に位置しています。狭い沖繩を離れて、はるばるポルビアまでやって来ましたが、子供の成長を眺めていると本当に移住してよかったとつくづく思うこの頃です。〔ポルビア〕

◎ 安里永光氏 (45) — サンパウロ市内 —

北中城村出身、一九五五年渡伯

履物製造業、家族九名

私は一九五五年に渡航、五九年まで農業、

六二年まで養鶏、以後現業についています。

ブラジルは気候と資源に恵まれており、年中健康的である。子供が多い家族には最良の国だと思う。働きながら誰でも大学まで行ける。でも移住を決意するからには最初はどうな仕事でもする覚悟で来て欲しい。又、それだけの覚悟があれば必ず成功間違いなし。〔ブラジル〕

◎ 山城 勇氏 (41) — サンパウロ市内 —

糸満市出身、一九五八年六月渡伯

蔬菜販売所及軽食堂経営、家族八名

私は、自分の家族は勿論、親戚も殆んど呼寄せております。

私は子供の将来を考えて移住したことを非常に良かったと思っています。〔ブラジル〕

(一九七〇年)
移住者の声

◎ 金城栄一氏 (39) | サンパウロ州内 |

糸満市出身、一九五八年渡伯

農業、家族七名

私は、いま年収二万ドル程度あげ安定した生活をしております。これからは親戚知人等をどしどし呼寄せたいと思います。

第一に気候がよく生活に適し、人種の差別がなく存分活躍ができ、また子孫の将来のためにも良い国だと思えます。〔ブラジル〕

◎ 新里清順氏 (66) | サンパウロ州内 |

南風原村出身、一九五四年渡伯

農業、家族六名

ブラジルは将来性に富む働き甲斐のある国だということをしみじみと味わっています。意志強固な開拓精神に富む青年はどしどし移住して下さい。〔ブラジル〕

(註) 長男は柔道場を経営。

◎ 大城浦繁氏 (57) | サントス市内 |

国頭村出身、一九五八年渡伯

製菓工場勤務、家族七名

移住は子供の将来を考え、一度決めたからには如何なる艱難辛苦にも堪え得る覚悟であるべきだと思います。

ブラジルの第一回移民(明治四二年六月)の業績は六十年後に花開き実りました。戦後の移民は三十年を待たないと思えます。

さる総選挙では国会議員、州議会議員、市議員等が多数日系から当選しました。ブラジル人が日本人を信用している証拠です。

その他日系から博士や教育者等もたくさん出ており、今や日本人活躍の時代来らんことを告げております。

ブラジルは人種の差別がなく、気候もよく、住みよいところだと思えます。幸い、私の一家全員健康で、親は勤めに、子供等はめいめい学業に励んでおり、毎日が希望に輝いている生活です。〔ブラジル〕

◎上原真勇氏(47)ーサンパウロ市内ー

那覇市小祿出身、一九五九年八月

渡伯。スーパード・マーケット経営

家族十三名

ブラジルは人種差別がなく、特に日本人は尊敬されているので、農業、商業面等で活動し易い。

自由の國ブラジルは世界中からの移民で成り立っている國です。誰でも早く事業をおこし、財産、土地を買い手が出来ます。

國は広く、戦争を知らない平和の國、気候がよく、台風や地震がない。

私の住んでいるサンパウロ市は人口六百万人、この四、五年來、日本人の中でも沖繩出身者の店が目立つようになり、現地人の畏敬の的になっています。

カンリンスランド、建材店、雑貨店、美容院、縫製業、薬局、時計店等、至るところにあり、従って言葉の不自由さは感じません。

〔ブラジル〕

◎具志堅 進氏(55)ーサンパウロ市内ー

東風平村出身、一九五四年十一月

渡伯、農業及商業、家族八名

私は子孫の繁榮を主眼に移住を決意しました。異國での生活は風俗、習慣や言葉の違い等で随分苦労しましたが、幸い先輩移住者の方々の御指導と御支援により、現在年収一五〇〇〇ドル程あり安定した生活を送っています。

ブラジルは一般的に後進國と言われていますが、美点は数え切れない位あります。気候が良いこと、人種差別がなく平和國家であり、物資に恵まれ、働き甲斐があり、これから発展することに希望と喜びと感謝の気持ちで頑張っております。

願わくは一人でも多くブラジルに移住されるようおすすめて致します。最善を尽してお迎えし、お引受けする心構えを持っております。

〔ブラジル〕

沖繩県海外移住の歩み (3)

一九三四（昭和9）年 開洋会館が県民並びに海外同胞の浄財寄附によつて、那覇市内に建設される。

一九四一（" 16）年 太平洋戦争（第二次世界大戦）が始まり海外移住は中絶する。

一九四五（" 20）年 八月十五日、日本の無条件降服により終戦を迎える。

一九四六（" 21）年 一月二十九日、沖繩県が日本から行政分離される。

一九四八（" 23）年 戦後初のアルゼンチン移住が呼寄移住から始まる。

十月二十二日、沖繩海外協会が活動を始める。（戦后再開）
一九五一（" 26）年 一月、沖繩群島政府に移住係ができる。

米國スタンフォード大学ゼイムス・テイグナー博士が中南米県人移住地を調べる（十月から翌年九月まで。）

ブラジル移住のすゝめ

在伯沖繩協会々長 屋比久 孟 清

「人間は、自分の殻に合うところに住む権利があり、それが一番の幸福だ。」、そういう意味でこの文章を書くことにしました。

ブラジルを端的にシンボライズする事象は何か、と問われたら、ちゆうちよすることなく、「豊かな大自然」と答えます。

若者は「なんだ、自然なんて何処にもあるじゃないか」とすぐ反論するかもしれませんが、ちよつと待って欲しい。日本で抱くあの自然観では律し得ない、いって見れば、日本では「期待される自然像」がここブラジルにはあるのです。裏をかえせば、計り知れない程の資源を有し、汚れを知らない自然だということです。

日本の自然は美しい山河を配しながらも、近年著しく疲弊して来ました。例えば、公害、それは人間にいじめ抜かれた自然の人間に対する無言の代償ではないでしょうか。外国から見ると、日本はまるで「一億総公害国民」が住んでいるように見えます。ブラジルの自然は、人間が建設的な意図でクワを打ち込めばそれに応えて呉れるだけの寛

大きさを残しています。そして、今まで神秘のペールで包んでいた豊かな資源を惜しげもなく人間の前に解放するのです。

ブラジルには夢があります。その夢は、そこに住む人達といつても隣合わせに住んでいます。エネルギツシユな若者達が「両手でしっかりつかんじやおう」とその氣にさえなればなんなく実現できる夢なのです。

日本には、射程距離内に入った夢というのがありますか。あつたとしても蜷気楼へしんきろう√見たいに空疎なものと違いますか。ホレ、よく言うでしょう「せめて夢だけは人一倍に」とい。そういう現実性のない淡い夢だと思えます。豊かさに裏付けられたブラジルでの夢は、つかみどころがあつて、はっきり具体性を伴っているのです。

さすがブラジルにも「金の成る木」だけはありません。額に汗して日々の労働に精出してこそ、夢も現実となります。日本では「モーレッソ人間」とかいう言葉が流行っているようです。遠くから見えていますと日本全体がモーレッソ国家、ソーレッソ国家に見えて来るから不思議です。日本を経済大国に押し上げた原動力の一つはこのモーレッソ精神、

一歩進んでソーレツ精神だったとも言えなくもありません。しかし、「明日の事をクヨクヨしても無理なのです。モーレツ精神やソーレツ精神にコトを決しようとしても無理なのです。モーレツ精神やソーレツ精神は確かに一時は線香花火のようにハデではあるが、一面すぐ崩れ行くもろさも感じられます。「オレ達の世代で達成出来なかつたものは、一つ君達の世代で築き上げてくれ」というふうなようさ、巧みに世代のバトン・タツチをする呼吸こそブラジルで生活する上に於て必要なのです。そうでないと、とてつもなく広い国土に圧倒され、精神力がいつの間にかすり切れてしまいます。

沖繩の一世移住者及びその子孫六万五千人がブラジル政府から「好ましい社会構成分子」と高く評価されるのも、コッコツとそれぞれの道程に歩を進めて行く琉球人独得の旺盛なる忍耐力の賜物に違いありません。

一九七二年、本土復帰後の沖繩は確かに政治問題は表面から一応後退するにしても、経済問題では従来以上にきびしい試練を受けることになりかねないとも限りません。しからは、それに対処するためにはどうしなければいけないのか。国造り、いや、沖繩の場合は厳密には島造りと言わなければなりません。島造りの一つの方策が海外移

住だと言えます。移住によって理想的な島造りの機会を得ることで、捨て石になるといふわけではありません。沖繩の住民が生々発展して、積極的に新しい可能性を追求していく考え方なのです。そして、おそらくそれが沖繩の豊かな島造りのために最も勇気ある協力となるでしょう。

民族融和を世界に誇るブラジルは勇気ある人々を双手を挙げて迎えてくれます。現代の移住者は昔のように「食えないから出て行く」のではなく、「より大きく発展するため海外に雄飛する」というふうに新しい理念を形成しつつあります。

日本の発展はエコノミック・アニマルとやかやく言われながらもはなやかです。今後もずっとはなやかなのか？ 専門的なことは未来学者のハーマン・カーンあたりにかかせるとして、外国に住む者にとっては、日本が危い橋渡りをしているような気がしなくてもありません。というのも日本には資源が殆んどないからなんです。

残念ながら、ハーマン・カーンはブラジルの将来を明るく彩ってはくれませんでした。ブラジルの将来が末広がりに広がって行くことを身をもって感知しているのは、カーンでもなく、実にここに住む人達なのです。現在が未来としっかり繋がっている国、それがブラジルだ

といえます。そういう国に来て、未来に夢をかける若者はいませんか健康に恵まれた若者、技術を身につけた若者たちの「若さ」を思う存分發揮して自己の人生を勝負する舞台ブラジル。生活や事業の場をここに築き、狭くなった地球を駆け回り、時々郷里訪問をするのも楽しいものでしょう。

沖繩の若い人々もぜひ考えて欲しいものです。

(一九七〇年一月)

沖繩県海外移住の歩み (4)

一九五二(昭和27)年 四月一日、琉球政府創立。総務局に移民課が設置される。

一九五三(" 28)年 四月一日、移民課が社会局に移る。

ポリビア国政府指令五七三一一号でウルマ移住組合の農業移住計画(一〇年間、三千戸一万二千人)承認される。

琉球政府は戦后初の海外移住調査員(稻嶺一郎、瀬長 浩)を南北米諸国へ派遣。

一九五四（" 29）年 四月、移民金庫が設立される。

初年度計画ポリビア移住者四百人、那覇港からロイヤル汽船で送り出す。（六月、七月。）

ポリビア国ウルマ耕地に洪水あり、病疫発生一四八人罹患、一五人死亡。

一九六〇（" 35）年 七月、移民金庫が解散して琉球海外移住公社が新設される。

一九六一（" 36）年 八月一日、移住課が経済局に移り、移住あっせん所及びポリビア移住地駐在事務所が新設される。

一九六三（" 38）年 七月、特殊法人・海外移住事業団設立（財団法人・日本海外協会連合会と日本海外移住振興株式会社
統合）

一九六五（" 40）年 七月一日、移住課が農林局に移る。

一九六六（" 41）年 四月一日より日本政府の移住者渡航費が従米の貸付から交付金制度に改められる。

五月九日、第九回日米協議委員会の合意事項によって、海外移住業務が日琉一体化される。

ペルー移住のすゝめ

ペルー・チャンカイ谷
日本人会々長 伊 芸 銀 勇



(ペルー)ラ・ウニオン運動場外苑で支部
長を囲んで記念撮影の現地県人指導者たち

当国への移住は三親等までの近親
呼寄だけで、その数も年間一五〇人
と限られている。

このような移住制限に加えて、戦后、
日本国内の労働力不足が響いて、ペ
ルー移住への関心は極めて低いと聞
いている。

具志堅所長の来秘を機会にペルー
在住の県人として後続移住者の受入
拡大に積極的努力を払うべきである
と私は考えている。

首都リマ市は人口二百万を超え、
近年急激に膨張した大都市で、蔬菜
はいくらでも消費するという。

農業を営む者にとつてはこの上ない好条件に恵まれている。三町歩のセロリー畑から三万ドルも上げたなどというウソのような実話があるくらいで農業天国ともいゝたくなる場所である。私も農業をやっているが、都市に住むのは馬鹿らしくなるほどベルーの農業はよい。その上、台風や寒害で作物を荒らされることはなく、水さえやっておけば良いという極めて好条件の自然にも恵まれており、トラクター一台あれば思う通りの営農ができる国である。

(一九七〇年一月)

〔編集者註〕 現在は真栄里宗善氏が会長をしておられ、伊芸銀勇氏はベルー中央日本人会長をしておられます。

沖縄県海外移住の歩み (5)

一九六七（昭和42）年 六月三十日、琉球政府移住あっせん所及び

琉球海外移住公社が廃止される。

七月一日、海外移住事業団沖縄事務所が開設され、翁長林正初代所長就任する。

九月十四日、沖縄海外移住家族連合会が発足。

一九六八（[#]43）年 三月、ポリビア国沖縄第一移住地に浸水あ

り、被害者一〇九戸、農作物及び家畜の被害総害約二七万ドルに及ぶ。

六月十八日、海外移住一〇〇年記念にあたり、琉球政府から移住功労者として稲嶺一郎、平良新助、十二月十九日、外務大臣より山川宗道、稲嶺一郎の各氏が表彰される。

八月、カナダへ戦后初の県人移住者が渡航。

一九六九（[#]44）年 二月、ブラグアイ国へ初の県人移住者二家族一四人が「あるぜんちな丸」で渡航。

沖繩県海外移住の歩み (6)

(一九六九) 四月、移住者子弟のための(県費)留学制度が設けられ、ポリビアから聴講生一名が琉球大学へ入る。

八月、移住者への本県奨学金制度が設けられる。

一九七〇(昭和45)年 一月十一日、ハワイ移住七〇周年記念祝賀会が、沖繩ハワイ協会主催により那覇市で催される。

一九七二(" 47)年 五月十四日、ブラジル同胞からの「復帰記念碑」が県庁構内に建立される。

五月十五日、米国から日本へ沖繩の施政権が返還され、沖繩県が誕生(本土復帰)する。旧琉球政府農林局農務部総務課移住係から県総務部涉外課外事移住係に移る。六月、同課に移住係が新設される。

一九七三(" 48)年 三月、屋良朝苗知事が南米各地を歴訪、本土復帰を報告するとともに県人を激励する。第一回県議団(平良幸市団長)も南米県人各移住地を視察、激励。

沖繩県海外移住の歩み (7)

(一九七三)十月、海外移住事業団の国内地方事務所の編成替えがあり、全国が12支部となり、沖繩事務所は支部に昇格、具志堅興栄所長が初代支部長に就任。

同月、県主管部の仲松庸幸総務部長らが懸案事務処理のため、に南米県人各移住地を巡歴。

一九七四(昭和49)年 一月、第二回県議団(与座康信団長)が、南米県人各移住地を視察、激励。

国際協力事業団法成立(衆議院通過五月十四日、参議院同月二十七日)

〔編集者註〕 この「沖繩県海外移住の歩み」は、海外移住読本(沖繩県総務部)日本人ポリビア移住史(同編纂委)沖連二十周年誌(在亜連合会)及当事業団支部資料のほか、硫大・新垣真保先生のご協力も得て整理したものです。

「あとがき」

本誌は、原稿の集められた時点と印刷された時点と約四年の時間的距りはありますが、原文の内容を損ねないよう、そして、現在でも、そのまま移住希望者への参考資料としていただけるよう充分留意して、編集致しましたが、お氣付の点は、ご指摘ねがいます。

なお、本紙表紙写真は、沖縄県議会第二回北南米視察調査団の新垣淑重先生撮影、本文中の写真は具志堅支部長提供、その他、註記のない使用資料は、海外移住事業団支部の配付資料「海外移住のしおり」その他を使用致しました。標題は具志堅支部長の揮（ごうぎ）である。

（編集者・沖縄支部調査役 中谷静雄）

あなたはどのコースを希望しますか？

移住の形態と行先	移住の条件と参考事項
<p>◎農業経営として自立するコース</p> <p>○自営開拓移住 (ブラジル、パラグアイ) ボリビア</p>	<p>1 50才未満の夫婦に15才以上の働き手1名以上健康かつ犯罪歴のないこと、農業者または農業経験3年以上(農高卒、大学農学部卒は、在学期間を経験年数として計算)</p> <p>2 土地分譲代金は長期分割払いまたは一括払い。携行資金は入植地によって異なるが、概ね100万円程度必要。</p>
<p>◎資金の少ない人が農園で働き、将来自立を図って行くコース</p> <p>○雇用農移住 (ブラジル アルゼンチン)</p>	<p>1 ブラジル (1)比ブラジル雇用農 18才以上で農業経験(3年以上)のある単身 (2)南ブラジル雇用農 青年または家族。</p> <p>2 アルゼンチン 18才以上で農業経験(3年以上)のある単身青年。 ※農業経験不足者、無経験者は、業事関係海外移住研修所を修了すれば資格が得られる。</p>
<p>◎工業技術者、技能者として企業に就職するコース</p> <p>○技術移住 (ブラジル アルゼンチン)</p>	<p>1 技術者 (1)短大(工)卒、当該職種実務経験3年以上、 (2)大学(工)卒、当該職種実務経験を有することお望ましい。</p> <p>2 技能者 (1)工高卒、当該職種実務経験3年以上、 (2)公共職業訓練所2年コース修了者またはこれに準ずる者。 当該職種実務経験3年以上。 (3)その他、当該職種実務経験5年以上。 ※年令21才以上。</p>
<p>◎知りあいの会社や知人の呼寄で行くコース</p> <p>○指名呼寄せ移住(ブラジル、アルゼンチン その他中南米各国)</p>	<p>1 被呼寄人と現地呼寄人との間で、就職先、雇用条件等、双方の事前了解の成立が必要。</p> <p>2 呼寄せ手続きのため、被呼寄人は、戸籍謄本、履歴書、写真(場合によって卒業証書、技術証明書)を現地へ送る要あり。</p>
<p>◎近親者の呼寄あるいは花嫁として移住するコース</p> <p>○近親呼寄せ移住 ○花嫁移住 (中南米各国) カナダ)</p>	<p>1 近親呼寄 同によって異なるが一等親から三等親以内の者。</p> <p>2 花嫁 (1)呼寄せ手続開始以前に入籍が必要。 (2)カナダの場合は入籍以前でも婚約者として渡航可能</p>

※ このほか、英語の話せる人にはカナダ移住の道も開かれています。
県庁総務部総務課移住係又は海外移住事業団沖繩支部でおたづね下さい。

